27Q-pm055

生命の大切さを知るために：患者から学ぶ

○福島　紀子[1], 岸本　桂子[1], 小林　静子[1], 服部　豊[1], 千葉　康司[1], 松山　賢治[1], 望月　真弓[1], 飯島　史郎[1], 石川　さと子[1], 板垣　悦子[1], 片山　和浩[1], 高橋　恭子[1], 小林　典子[1], 川村　和美[2,3]（[1]慶応大薬, [2]スギメディカル, [3]静大人）

【目的】平成 18 年より構築してきた１学年、２学年と継続したヒューマニズムに関する教育に、これまで C17(1)で行っていた薬害を組み込み、３年生を対象に科目名「患者から学ぶ」を開講した。低学年での生命倫理、医療倫理に続き、薬剤師の職業倫理に繋げる教育プログラムを実施したので報告する。

【方法】本科目では、患者や、健康被害者による患者の立場からの医療に対する意見と企業、医療現場からの意見を聴くことで、薬剤師としての行動・態度を考え、薬剤師としての倫理観を身につけることを目標とした。従ってこの科目は、多くの外部講師で構成される。前半は、患者や障害者などからの講話とし、後半は、薬害の被害者からの講話を組み入れた。被害者を巡る社会的背景なども含め医薬品被害について考えることと、副作用の発生時の様子などを知り、副作用発生を避けるための薬剤師の役割を検討する。その後で医薬品開発立場や臨床の立場からの講義を組み込み、一連の話を客観的に検討できる構成とした。

最後に、薬剤師の職業倫理について検討するため、薬剤師として直面するジレンマを題材に、薬剤師の職業倫理に基づいた対応について SGD を行い、ポスターにて発表を行った。本プログラムについて、学生による全般的な感想と、SGD 前後に実施した倫理に関する質問に対する 5 段階評価の差より評価した。

【結果】授業全体に対する感想では、「患者さんの生の声を聞くことができてよかった」、「考えさせられた」が多く見られ、将来薬剤師になったときにどう対処すべきか等を考える良い機会であったことがうかがえた。また、SGD 前後で有意差が見られた質問の中に、「倫理観は個人の問題であるから個々の判断に任せるべきで、教育の必要はない」があり、教育の必要性を感じるようになったことが示された。